

恵解山古墳

—第10次調査の概要—

2010

長岡京市教育委員会

編集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

はじめに

遺跡は、長岡京市の歴史や文化の理解に欠くことのできない貴重な財産です。特に国史跡恵解山古墳は、将来の地域づくりの核となるものとして、確実に次世代に継承していくことが求められています。

長岡京市では、平成17年度に基本計画を策定し、史跡の保存や、周辺地も含めた整備・活用に向けての基本的な方向を示し、目指すべき整備内容、事業スケジュールを示しました。しかし、駐車場やガイダンス施設などの周辺整備用地の確保につきましては財政上の理由により、まず史跡地内の保存・整備事業を先行させて着手することになりました。平成20年度の基本計画の見直しでは、ガイダンス施設等の利便施設につきましては、トイレのみを史跡地の南東部に設けることにいたしました。それとともに古墳南側にエントランス広場を設け、そこに古墳のレプリカ展示を行うとともに、大型の銘板や説明板等を設置する予定です。

さて、本書は、古墳整備のデータを取得する目的で、平成21年度に国庫補助事業として実施いたしました恵解山古墳第10次調査の成果をまとめたものです。昨年度の調査で古墳東側にも造り出しがあることが確認されたため、本調査では、東側造り出しの形状と規模を明らかにするための調査を実施しました。造り出しは西側造り出しと非対称で規模も大きく、形態や構造が異なることが明らかとなり、墳形を復原するうえで、貴重な基礎資料を得ることができました。

結びにあたり、発掘調査にご協力をいただきました近隣の皆様、調査について種々のご指導いただきました諸先生方、また調査を担当いただきました財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの機関に紙面をお借りしまして深く感謝申し上げます。

平成22年3月

長岡京市教育委員会
教育長 芦田 富男

例 言

1. 本書は、平成21年度に国庫補助事業として実施した恵解山古墳第10次(長岡京跡右京第987次)調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、平成21年11月24日から平成22年3月31日まで行なった。調査面積は、合計360m²。
3. 調査は、長岡京市教育委員会から委託を受け、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。
4. 表紙の写真は、上空から撮影した恵解山古墳と周辺の景観である。
5. 本書の執筆、編集は埋蔵文化財センター原秀樹が行なった。

目 次

- 1 位置と環境……………3
- 2 調査経過……………4
- 3 第10次調査の成果 ……6
 - 10-1 調査区……………6
 - 10-2 調査区……………7
 - 10-3 調査区……………9
 - 10-4 調査区……………11
 - 10-5 調査区……………11
 - 10-6 調査区……………12
- 4 出土遺物……………13
- 4 まとめ……………14



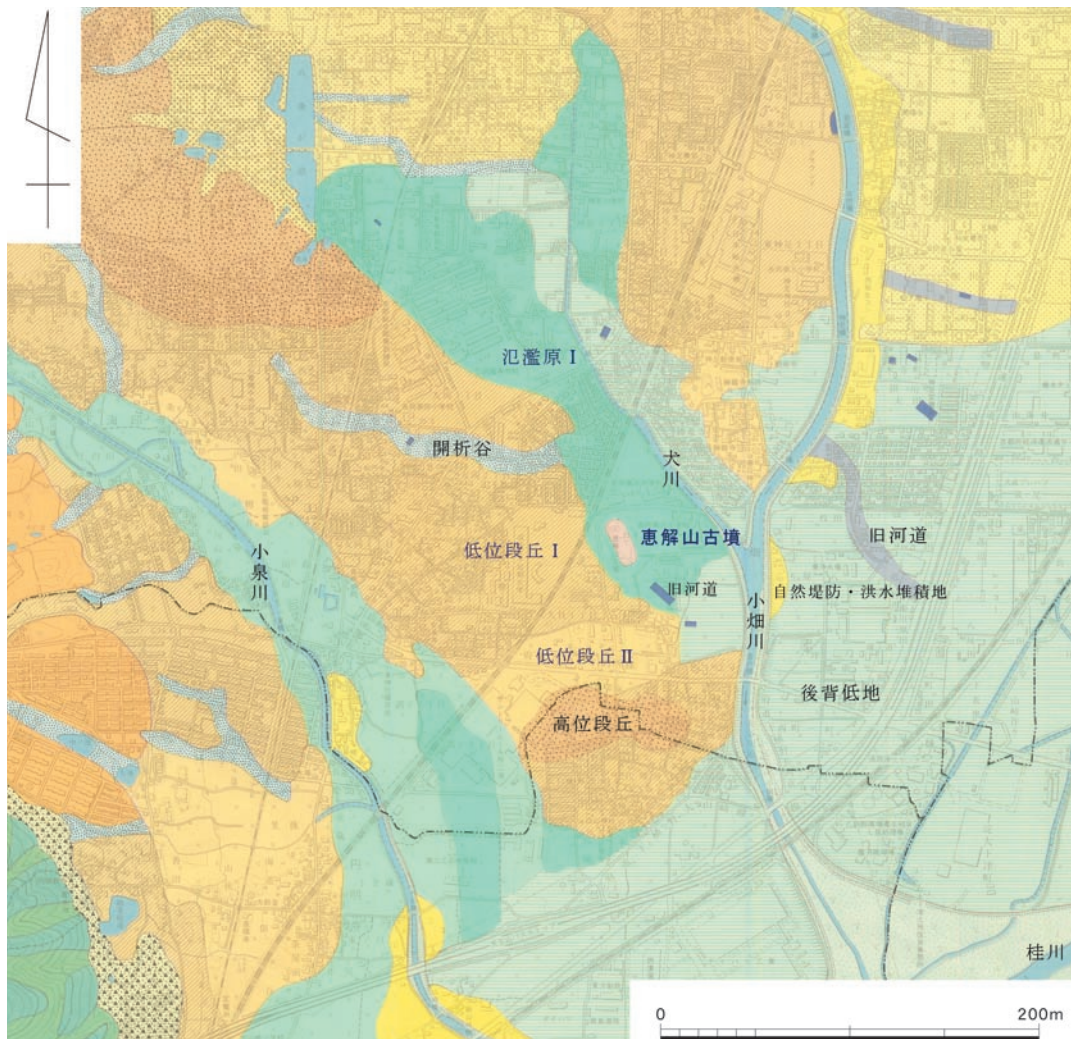
第1図 10-2調査区 くびれ部の埴輪列と転落石（北西から）

1 位置と環境

恵解山古墳は、JR長岡京駅の南方約1000mにあり、長岡第八小学校と長岡第三中学校に隣接する。古墳の現状は、後円部に墓地、前方部は畑地と竹やぶ、周壕部は畑地とグラウンドなどに利用されている。周辺は、近年の宅地開発によって小畑川の堤防裾まで住宅地が変わっている。

古墳は、桂川の支流である犬川と小畑川が合流する地点の西方にあり、標高17m前後の氾濫原に位置している。地形条件図によると、恵解山古墳西側の低位段丘は、段丘側が抉られたように凹んでおり、古墳は低位段丘を利用して切り土や盛土による築造が行なわれたと推測される。

周辺の調査では、縄文時代前期の竪穴住居や弥生時代前期の土坑などが発見されている。恵解山古墳は、乙訓地域の中期の前方後円墳では最大規模の古墳である。また、長岡京はもとより当地付近には長岡京廃都後に山城国府の移転があり、中世には勝龍寺城に守護関係の施設が置かれたことなどは、本地域の水陸交通の利便性が居住環境や政治的支配にとっても有効であったことを物語るものであろう。



第2図 恵解山古墳周辺の地形条件図 (1/20000)

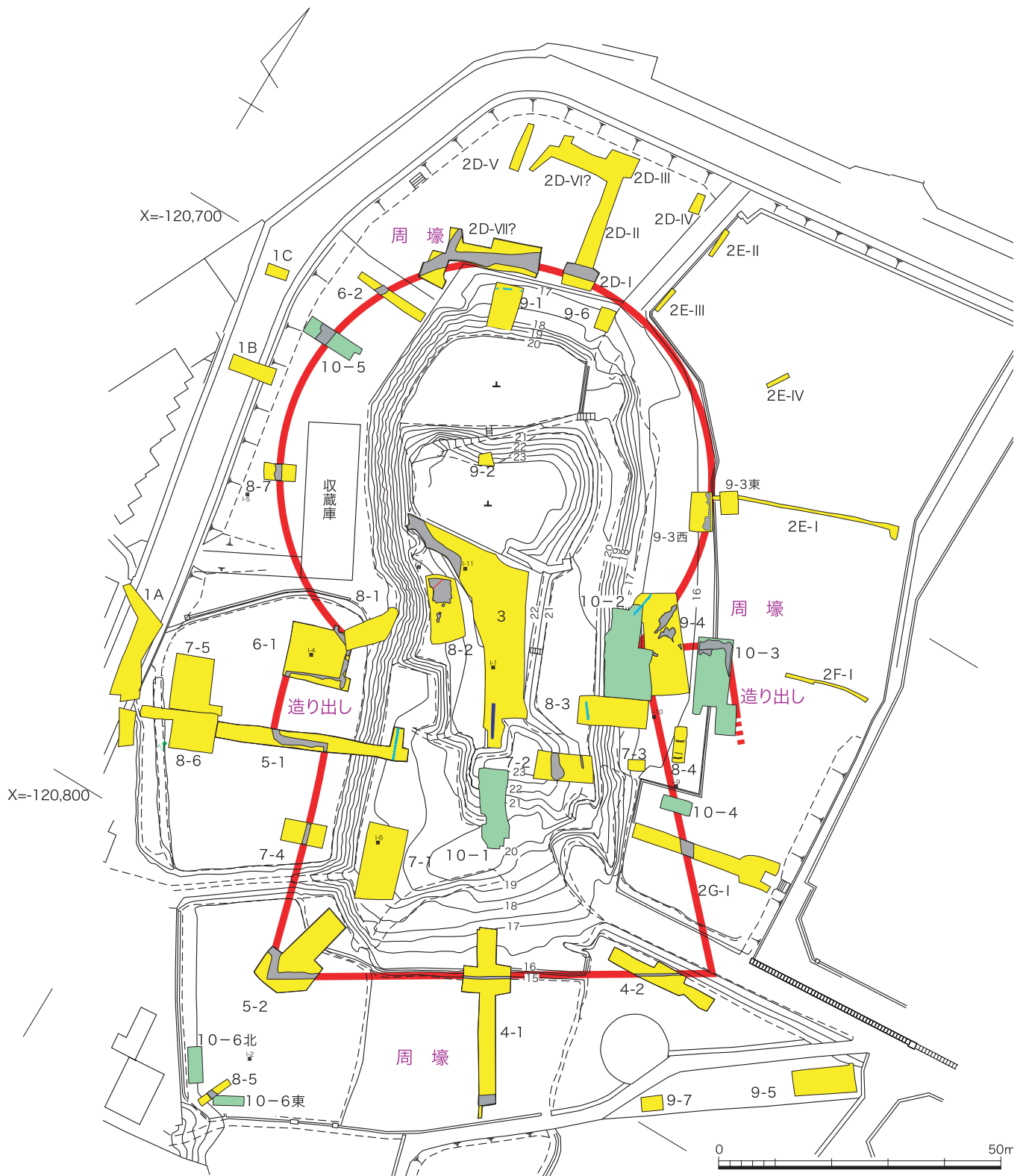
2 調査経過

恵解山古墳にはじめて考古学者の手が入ったのは、1924（大正13）年の梅原末治による踏査であり、墳形とその規模、埴輪などの存在が確認された。その後、1966（昭和41）年には京都府教育委員会が墳形の地形測量を行ない、盾形の周壕を巡らせたことが新たに判明した。そして1967・77（昭和51・52）両年には周壕部分を対象にした1・2次調査が、さらに1980（昭和55）年には後円部から前方部にかけての3次調査がいずれも本市教委委員会を主体として実施された。とくに、3次調査では鉄製の副葬品のみを納めた施設を確認でき、大いに注目される成果を得ることができた。なお、当古墳は1981（昭和56）年に国の史跡に指定を受け、後世に保存されることになった。（「恵解山古墳」『長岡京市史』資料編1より抜粋）。

これまでの各調査成果については、以下の調査一覧表のとおりである。

恵解山古墳の調査一覧表

調査回数	長岡京跡調査回数	調査期間	調査面積	調査主体	調査の成果	文献
		1924年		京都府	・梅原末治氏による古墳の踏査。 ・墳形と規模、葺石と埴輪を伴うこと、 ・埋葬施設が竪穴式石槨であることなどを紹介。	京都府史蹟勝地調査会報告第6冊(1925年)
		1967年		京都府教育委員会	・分布調査の際に測量調査が実地され、おおよその墳形と規模が明らかになる。	埋蔵文化財発掘調査概報1968(1968年)
第1次		1975年3月10日 ～1975年3月19日		長岡京市教育委員会	・市道敷設工事に伴う調査。	長岡京市文化財調査報告書第2冊(1976年)
第2次		1976年11月26日 ～1977年1月11日		長岡京市教育委員会	・中学校グラウンド造成工事に伴う調査。 ・後円部および前方部の裾部付近の葺石を確認。	長岡京市文化財調査報告書第3冊(1977年)
第3次		1980年4月15日 ～1980年7月15日	313㎡	長岡京市教育委員会	・墓地拡張工事に伴う調査。 ・前方部中央で副葬品のみを埋納した施設を検出し、 ・鉄刀、鉄剣、鉄鏃など多量の武器類が出土。 ・西側くびれ部第3傾斜面の葺石を検出。 ・後円部の埋葬施設に関係する管玉、結晶片岩などが出土。	長岡京市文化財調査報告書第8冊(1980年)
第4次	右京第783次	2003年8月11日 ～2003年11月10日	179㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。 ・前方部前端裾部の葺石を検出し、前方部幅が大きくなることが判明。 ・周壕が浅いことが判明し、堆積土中から長岡京期の遺物などが出土。 ・周壕外周の南辺を確認。	長岡京市文化財調査報告書第46冊(2004年)
第5次	右京第827次	2004年9月1日 ～2004年10月28日	218㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。 ・前方部南西隅裾部の確認と、西側に造り出しの存在することが判明。 ・前方部西側の第2段テラスと埴輪列を確認。	長岡京市文化財調査報告書第47冊(2005年)
第6次	右京第859次	2005年9月20日 ～2005年11月9日	142㎡	長岡京市教育委員会	・範囲確認調査。・墳丘西側くびれ部と造り出し、 ・後円部裾部付近の葺石を検出。 ・造り出しの規模が判明し、くびれ部との間から導水形とみられる冢形埴輪やミニチュア土師器などが出土。	長岡京市文化財調査報告書第48冊(2006年)
第7次	右京第893次	2006年12月1日 ～2007年3月5日	231㎡	長岡京市教育委員会	・保存整備に伴う調査。 ・前方部東側第3傾斜面の葺石と第2段平坦面、 ・西側裾部の葺石、杭などを確認。 ・墳丘盛土の構築状況などを確認。	長岡京市文化財調査報告書第50冊(2007年)
第8次	右京第920次	2007年11月1日 ～2008年2月29日	272㎡	長岡京市教育委員会	・保存整備に伴う調査。 ・前方部東側の第2段テラスと埴輪列を確認。 ・西側くびれ部の第3傾斜面の葺き石と第2段テラスを確認。 ・前方部から鉄斧、鉄鏃、鋤先などミニチュアの鉄製品が出土し、農具類を埋納した施設が存在が浮かび上がる。 ・埋葬施設に関係する甕山石の破片が出土。 ・周壕外周の南西隅部付近を確認。	長岡京市文化財調査報告書第52冊(2008年)
第9次	右京第959次	2008年12月1日 ～2009年3月31日	277㎡	長岡京市教育委員会	・保存整備に伴う調査。 ・後円部の1段テラスと埴輪列を確認。 ・墳丘東側にも造り出しの存在することが判明。 ・後円部の竪穴式石槨に使用されたとみられる結晶片岩と石英斑岩がまとまって出土。 ・周壕外周の東辺と南辺を確認。	長岡京市文化財調査報告書第54冊(2009年)



- これまでの調査区
- 今回の調査区
- 復元された墳丘
- 葺石または転落石
- 埴輪列
- 鉄製品埋納施設

第3図 恵解山古墳の調査区配置図 (1/1000)

3 第10次調査の成果

10-1 調査区

現況は、恵解山古墳の前方部で最も高い標高23mの等高線が通る竹やぶに位置する。周囲は、北側を第3次調査で検出された鉄製武器埋納坑跡の明示施設と墓地に隣接し、西側は開墾された畑地との境が崖面となっている。前方部の南東隅は、竹やぶの土取りで大きく改変されているが、南側は緩やかな斜面となっている。今回の調査区は、第8次調査の第3調査区から鉄製農工具類が出土したことを受けて、前方部に複数の埋納施設が存在する可能性を探るために、鉄製武器埋納坑跡を通る恵解山古墳の推定中軸線上に設定した。

10-1 調査区は、長さ14m、幅4mある。竹の伐採と根起こし後に表土の除去を始めた。緩やかに傾斜する斜面は、竹の根が張る表土と竹やぶ客土に覆われており、これを取り除くと北から南へ下る階段状の段差が3ヶ所検出される。各段は1～1.5mの高低差があり、そのまま東西方向に延びるようである。さらに、調査区南端では深さ約2mの落ち込みとなっており、底には小さな石礫が投棄されている。落ち込みの底と階段状の段差の上段は、約4mの高低差がある。底面は南側が高くなり石礫も少なくなるが、終息せずにそのまま南へ延びている。遺物は、客土層から近世の陶磁器片、石礫内から埴輪片が少量出土しただけであり、階段状の段差と堀状の落ち込みの時期を示す遺物は無かった。

本地点では、前方部の墳丘盛土層を切り込む階段状の段差によって前方部は大きく改変されており、新たな埋納施設は確認することができなかった。鉄器埋納施設と階段状の段差上段の高さは、現況では本地点が0.7m程高くなっている。墳丘の盛土層は、



第4図 10-1 調査区掘削前の状況（南東から）



第5図 10-1 調査区全景（南東から）



第6図 10-1 調査区全景（北から）



第7図 10-1 調査区の落ち込み（北東から）

黄白色系の粘質土と橙色系の小さな石礫を含む土で構成されており、深い落ち込みの壁面には縞状に堆積する古墳盛土層が観察できる。

10-2 調査区

墳丘の東くびれ部を確認するために、第9次調査の第4調査区で確認された後円部第1段埴輪列の延長部分に約5m四方の調査区を設定した。現況は、高低差3m前後の急な斜面地の竹林となっているが、昔の地形図によると大きく内側に挟り取られていたことがわかる。調査では、竹やぶ表土の下は廃材を含む土で埋め戻されており、ほぼ埴輪列が検出された高さまで後円部墳丘が削平されていることが判明した。その後、本地点は南側に拡張してくびれ部から前方部の埴輪



第8図 10-2 調査区掘削前の状況（北東から）



第9図 10-2 調査区拡張部（東から）

列を追求するための調査を行なうこととなった。

拡張後の調査では、初めに近世以後の井戸掘形に辛うじて破壊を免れた円筒埴輪列の一部を発見した。これ以後、崩落した土砂と石の除去を進め、埴輪列がくびれ部に当たることが確認された。後円部の埴輪列は、昨年度の調査分 13 個体と合わせて 23 個体あり、さらに前方部側に 5 個体並ぶ。樹立した埴輪列は一旦ここ



第 10 図 10-2 調査区段差のある埴輪列（東から）

で終息しており、当初はこれに続く南側の埴輪列は破片が遊離した状態で出土したことから崩れた可能性が高いと思われた。埴輪の個体は小破片も含めて 8 個体分と推測した。しかし、その後の調査でこの中には樹立した状態を保つものが二三あり、一部で掘形を確認したことからくびれ部の埴輪と同列ではない一段低い位置に埴輪を据えたものと判断した。また、この付近から南側は地山と古墳築造時の地表面に想定される黒色土が一段落ち込んだ状態で延びており、造り出しの築造に伴い整地されたことを示唆している。一方、東造り出しと前方部の納まり方については井戸に攪乱されて明らかでないが、前方部の埴輪列と後述する 10-3 調査区の東西方向の石列がほぼ直交すること、東造り出しが取り付く位置はくびれ部にかなり近いことが明らかとなった。



第 11 図 10-2 調査区くびれ部の埴輪列（北から）



第12図 10-3調査区全景（南東から）

10-3調査区

東造り出しの形状を確認する目的で設定した。調査区は、当初長さ12m、幅6mであったが、後に一部拡張を行なった。

整地土以下、水田耕作関連の堆積層を除去すると、東西方向に一直線に伸びる石列と、周壕底に下る緩やかな斜面に細かな石を散らしたような石敷が現われる。部分的に石列の内側にも石敷はみられるが、拳より小さな石が大半であり、葺石のように貼付けた石ではない。石敷の東側では、耕作時に脱落した石がありやや疎らになるが、西側はほぼ旧状を保っているようである。石敷の輪郭は、石列が残らない東側でも盛土との違いから、西から南に折れる隅角が明瞭である。断割りによると、調査区南部の石礫は地山の一部が現われたものであり、造り出しの石敷とは異なる。



第13図 10-3調査区の東側造り出しの列石と石敷（南西から）

また、造り出しは地山を整形した後に盛土を行っており、石列の内側に黄灰色系、褐色系と黒色系などの土を盛り、部分的に作業単位とみられる小さな土の固まりがわかる。石列外側の石敷面は、砂礫を含む土で周壕底まで傾斜を付け、その上に石をのせている。南辺については明らかにできなかったが、10-4調査区の東端に堆積する黒色粘土層は、造り出しの盛土に類似する点がやや気掛かりである。10-3と10-4調査区では転落した石が見当たらない状況は、造り出しに当たることを暗示するのかもしれない。なお、造り出しの上を通る東



第14図 10-3調査区石敷の断割り（北東から）

へ曲がる溝と南北方向の溝は、近世以降に属する。遺物は、埴輪片が少量出土した程度である。

東造り出しは、西造り出しと同じく地山を整地した後に盛土を行っているが、東側では周壕と接する斜面に石敷が巡り、石列内側の石敷付近で平坦となる。これより上面は耕作により削平されているが、石列内側の石敷は疎らであるが斜面の石敷と変わらない状態であることから露出していたと想定される。すでに石は失われているが、区画する石列を境にして壇状の高まりが設けられたものと推測される。



第15図 10-3調査区の東側造り出しの列石と石敷（拡張後・北西から）



第16図 10-4調査区全景（南西から）



第17図 10-4調査区細部（北東から）

10-4調査区

前方部東側の周壕部で行なわれた第2次調査のG-1調査区では、葺石の転落状況が検出され墳丘が著しく損なわれていることが確認された。本地点では、改めて墳丘裾の基底石と葺石を確認するため、中学校グラウンドのフェンスを一時撤去して長さ5m、幅2.5mの調査区を設定した。

グラウンドの整地土を含む現代の盛土層が約1.4mあり、その下に耕作土が残る。地山である青灰色粘土層の直上には、部分的に細かな石と砂礫が堆積するが、転落石などは皆無であった。東壁には、造り出しの盛土に類似した暗灰色系粘土が堆積しており、盛土が順に重なる様子が確認できる。

10-5調査区

後円部の葺石と基底石を確認するために長さ10m、幅3mの調査区を設定した。これまでの



第18図 10-5調査区全景（西から）



第19図 10-5調査区全景（南西から）



第20図 10-5調査区の葺石（南西から）

調査と同じく、後円部の墳丘は段丘礫層の地山面まで削平されており、周壕内には人頭大ほどの石が調査区西端まで延びている。緩やかに立ち上がる地山斜面に残る石は、大きなものでもこぶし大程度であり、検出状況は部分的に崩れた残り方をしている。明確な基底石は確認できなかった。遺物は、形象埴輪を含む埴輪片が少量出土している。



第21図 10-5調査区周壕内の転落石（南から）

10-6

本地点では、周壕南西隅の外周部を確認する目的で、現在の畦畔に沿って南北方向に北調査区、東西方向に東調査区を設定した。すでに、周壕南側の外周部は、第4次、第8次、第9次調査が実施されており、南から北へ向かって緩やかに傾斜する外周部が確認されている。

両調査区では、水田耕作土と床土層の下からこぶし大ほどの小さな礫が密集する礫層と、周壕内に堆積する黄灰色系の粘質土を検出した。東調査区では、小さな礫が疎らに点在する段丘礫層が、弧を描いて第8次調査の第5調査区に延びており、周壕の外周斜面がやや北に曲がるのがわかる。周壕内から土師器、須恵器、埴輪片が出土した。一方、北調査区では地山である段丘礫層に盛土された多量の礫を含む堆積層からは、埴輪片と結晶片岩のほかに長岡京期を中心とする須



第22図 10-6調査区全景（南から）



第23図 10-6北調査区全景（南東から）



第24図 10-6南調査区全景（南西から）

恵器や瓦が出土しており、周壕が一部埋め戻されたことが判明した。本来の周壕外周部はこれより西側に想定される。

出土遺物

主に10-5調査区と10-2調査区から円筒埴輪、形象埴輪の小片と結晶片岩が出土している。前方部の10-1調査区は、攪乱された二次堆積層から埴輪片が出土した。10-2調査区では、後円部の埴輪列と新たに前方部の埴輪列を確認した。10-6調査区は、周壕内に長岡京期を中心とする遺物を含む。遺物は、形象埴輪の小片と結晶片岩などがある。今回の調査で出土した埴輪は小片が多く、量も少ない。わずかに残る線刻表現や形状などから家形埴輪、蓋形埴輪の笠部と立



第 25 図 調査中の恵解山古墳（北東から）平成 22 年 1 月撮影

ち飾り部、綾杉文を施した草摺形埴輪などが出土している。なお、10-2 調査区の埴輪列は出土状態を保持したまま土嚢と砂で埋め戻している。

まとめ

10-1 調査区についてはかなり改変されており、古墳に関する遺構は確認できなかった。階段状の段差と深い落ち込みの全容は不明であるが、昨年の調査で後円部に大規模な平坦面が構築されていることがわかっており、本地点についても古墳を利用した砦のような施設が造られた可能性を考えたい。10-2 調査区では、後円部の第 1 段埴輪列の続きと、新たに前方部の埴輪列に続くくびれ部を確認した。一方、調査区南半部には、堅く締まった白色系の粘土層が厚く堆積しており、第 8 次調査の第 3 調査区で確認された古墳盛土を起源とする層が本地点から切り込むことが判明した。10-3 調査区では、墳丘東側の造り出しを確認することができた。北辺では石列と石敷が残り、東辺は石敷が疎らに残る程度であったが、新たに東造り出しが西造り出しより規模が大きく左右非対称であることが判明した。10-4 調査区は、転落石が全く確認されなかったのは予想外であった。10-5 調査区は、これまでと同様に後円部の葺石は検出されたが、基底石については確認できなかった。10-6 調査区では、東調査区から周壕外周部を確認したが、北調査区では長岡京期を中心とする時期に一部埋め戻されていることが判明した。周壕内から同時期の遺物はこれまでも出土していたが、古墳の土地利用に関する新たな資料となった。

報告書抄録

ふりがな	いげのやまこふんだいじゅうじちようさがいよう
書名	恵解山古墳第10次調査概要
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第56冊
編著者名	原 秀樹
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いげのやまこふん 恵解山古墳	ながおかきょうしよらうじ 長岡京市勝竜寺 1206-1他	26209	200	34°54'39"	135°42'2"	20091124 } 20100331	360 m ²	保存整備
ながおかきょうしよらうじ 長岡京跡			107					
みなみくろがづかいほき 南栗ヶ塚遺跡			103					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恵解山古墳 (第10次)	古墳	古墳時代	後円部と前方部の第1段埴輪列、東造り出しの石列と石敷、後円部の葺石と周壕。周壕南外周。	円筒埴輪、形象埴輪、結晶片岩	墳丘東側のくびれ部の埴輪列を確認。東造り出しは西造り出しより規模が大きく、左右非対称と判明。
長岡京跡 (右京第987次)	都城	長岡京期		土師器、須恵器、瓦	
南栗ヶ塚遺跡	集落	旧石器～江戸		土師器、須恵器、瓦器、陶磁器	

国土座標値は、旧国土座標系を使用している。

<p>恵解山古墳第10次調査概要 長岡京市文化財調査報告書 第56冊</p> <p>平成22(2010)年3月26日 印刷 平成22(2010)年3月31日 発行</p> <p>編集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター 〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1 電話 075-955-3622(代) FAX 075-951-0427</p> <p>発行 長岡京市教育委員会 〒617-8501 京都府長岡京市開田一丁目1番1号 電話 075-954-3557(代) FAX 075-954-8500</p> <p>印刷 株式会社 ダイ 〒604-8241 京都市中京区三条通新町西入ル釜座町22 ストックビル三条烏丸4F 電話 075-254-0646 FAX 075-254-0647</p>
--